
破壊神は少女のために

遠山竜児

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

破壊神は少女のために

【Nコード】

N3588W

【作者名】

遠山竜児

【あらすじ】

神が力を振るうが如く人を破壊するから、「破壊神」。一般の高校生からは畏怖を込めて、不良達からはいずれ自分が奴を倒してその地位につくという意味を込めて、倉崎はそう呼ばれていた。そんなある日、倉崎は小学生の少女にナイフを向けられる。「お前がお兄ちゃんを殺したんだ!」と。やがて彼は、この街の闇と抗争に巻き込まれてゆく…。

自分を襲う相手だけに「破壊」を与えてきた少年が、一人の少女に変えられていく、そんな物語。「俺は壊すことしかできない。だから

ら、あのガキを泣かせた野郎は……、容赦なく壊す」

倉崎の帰路

高校からの帰り道、倉崎は囲まれていた。

金髪のロン毛、茶髪の本ヒカン、黒髪のオールバック…

夏服の半袖Yシャツをだらしなく着崩し、耳にピアスを空けている三人は、老若男女誰にとっても「不良」と認識しやすい男達だった。

短絡的で無気力で、そのくせ自己の力を誇示することには労力を惜しまない。

そんな現代不良の典型が、廃ビル付近の人通りの少ない路地で倉崎を囲んでいた。

「倉崎い！ てめえ、舐めてんじゃねえぞコラ！」

右斜め後ろでポケットに両手をつ突っ込んでいる金髪ロン毛に恫喝される云われは、倉崎にはない。彼にしてみれば不良とは見くびるものではなく、ただただ関わり合いになりたくないものだからだ。

故に、この不良達に囲まれたときも、「家に帰るから通してくれ。話があるなら歩きながら聞いてやるから」と、「いつもどおり」にあしらっていたのだが……

彼はその言動が、世間一般に言う「舐めている」行為だということに気づいていない。

「おいおいおい倉崎くんよお、この状況がどういふことか、わかってんのかアン!？」

右斜め後ろで鉄パイプを引きずってる茶髪本ヒカンが言う「この状況」というものが、倉崎の認識とは大分離れているものだということはなんとなく理解できた。

だが、認識の違いを理解できたとしても、茶髪本ヒカンが意味する「この状況」というものまではわからない。

倉崎にとつては、「また不良がケンカを売ってきた」程度の認識しかないのだから。

(まったく、また邪魔な奴らに道を塞がれた……)

「悪いが、さっぱりわからねえ。そこをどいてくれ」

倉崎はため息交じりにそう呟くと、三人の不良は口々に彼を罵倒した。

彼はそんな口汚い言葉にいちいち顔をしかめることはないが、この騒音はやはり不愉快だった。

彼はパーマのかかった頭を右手で掻きながら、今度は深くため息をついた。

「倉崎オイコラ、てめえ「破壊神」とか呼ばれて調子こいてんじゃねえぞ。てめえは今日ここで、俺らにみじめにボコされるんだからよお」

倉崎の正面で金属バットを肩に提げている黒髪オールバックが、両目を大きく開いて倉崎を睨みつけた。その顔には、他の二人同様に余裕溢れる笑みが浮かんでいる。この人数なら倉崎は負けるに違いないと、タカをくくっているようだ。

しかし倉崎は動じない。この状況においてポーカーフェイスでいられることは、むしろ不良達より余裕があるという証拠に他ならない。

もつとも、彼にとっては余裕どころか、目の前にある小石がほんのちよつと邪魔だから蹴り飛ばそう、くらいにしか考えていないのだが。

「ボコせるんならどうぞボコしてくれ。じゃ、俺は通るから」

彼はそう言って、目の前の黒髪オールバックを押しつけようとしたのだが……

「ザケンじゃねえぞクソが！」

黒髪オールバックが、倉崎に向け金属バットを振り下ろした。容赦なく、狙いは頭。当たれば出血は間違いない一撃が、倉崎の頭を

……襲わなかった。

倉崎が、おもいつきり振り下ろされた金属バットの中腹を、おんじのひら右掌

で掴み取っていたのだから。

「なっ……」

三人組は一瞬言葉を失ったが、

「殺す！」

「クソ野郎があ！」

「ざけんじゃねえぞ！」

すぐに襲撃を再開した。金髪ロングはポケットから伸縮式警棒を取り出して殴り掛かり、茶髪モヒカンには鉄パイプで、黒髪オールバックはバットを持っていない方の手で殴り掛かった。

……まあそれも

全て無駄だったのだが。

「ったく、仕方ねえ……」

倉崎は肩にかけていた通学鞆から手を放すと、三人組の猛攻を木の葉が舞うようにヒラヒラと躲し、同時にそれぞれの顔面に拳をお見舞いしていた。

正確無比に鼻っ柱を捉え、容赦なくへし折る。拳のあまりの速さに、三人組は何が起きたかを理解するまもなく鼻血を噴出した。

倉崎は動きを止めることなく、今度は三人組の顎めがけて拳を浴びせる。顎が碎ける鈍い音とともに、三人組は残らず意識を失いその場に崩れ落ちた。

正当防衛とはいえここまで人を傷つけておきながら、彼は落ち着き払っていた。通行に邪魔だった小石を退けただけ。罪悪感も達成感も得られるはずがない。彼はアスファルトの上で脳震盪を起こし気絶している三人組には目もくれず、再び帰路につくのだった。

倉崎の帰路〔2〕

「破壊神」

彼は不良のみならず、市内の高校生の多くからそう呼ばれている。神が力を振るうが如く人を破壊するから、破壊神。

一般の高校生からは畏怖を込めて、不良達からは、いずれ自分が倉崎を倒してその地位につくという意味を込めて、そう呼ばれていた。

彼は別に、破壊神と呼ばれることに何の感慨も抱いていない。一般人からは怯えられ、不良達からは目の敵にされるのだから、このような称号など彼にとってはむしろ余計なものだった。

これがもし、破壊神の名に不良も怯えてくれるのなら、無駄にケンを力をつっかけられることもなくなり多少は過ごしやすくなるのだが、彼はこの街でひとり暮らしを初めてまだ三か月しか経っていないので、破壊神の恐ろしさはそこまで伝わっていないのだ。

中学生時代のように、余りの強さ故に誰にもケンを売られることがなくなるまでになるのは、まだまだ時間が掛かりそうだった。

不良共を蹴散らし（といっても彼には「退かした」くらいの認識しかないのだが）、廃ビル沿いの路地をしばらく歩いていると……
またもや、三人組の男達に遭遇した。

とは言っても、先ほど彼に襲い掛かった不良三人組ではない。

半袖のYシャツをいたって普通に着こなしているし髪型もいたって普通な高校生三人が、倉崎の進路を塞いでいる。

……いや、三人組ではなかった。三人に囲まれて、小柄な男子高校生が一人、今にも泣きだしそうな顔を浮かべている。その小柄さと地味さ故に、倉崎が最初彼の存在を認識できなかっただけだ。

「もう、許してください……。このお金がないと、夕飯すら作れないんです……」

「そんな固いこと言わずにさ、貸してくれよ」

「俺達そのお金がないと、ゲームセンターに行けなくて死んじゃうんだよ？」

「そうそう、必ず返すからさ、人助けだと思って、ね、お願い」

残り少ない蠟燭ろうそくの火みたいに、か細い小柄男子の声。その切実な頼みを華麗に受け流し、金を巻き上げようとする三人の男子。

彼らが金を借りても返す気がないのはわかりきっている。そのよ
うな行いをする輩は、見た目が普通でも不良であるという風に、倉
崎は認識していた。

……だからといって、何か思うところが生じるわけでもないのだ
が。

「悪いがそこ、どいてくれねえか？」

彼らが通行の邪魔だったので、倉崎は道を通すようお願いした。
口調こそぶつきらぼうだが、いたって穏便に、なんの敵意もなく彼
はお願いした。

囲んでいる側の三人は、「あつ、サーセン」といった感じですね
なりと道を空けてくれた。どうやら彼らは、無駄なケンカはしない
主義らしい。

倉崎は道が空いたので当然のように通ろうとしたのだが……

「は、破壊神だ！ たたた助けてください！ カツアゲされてるん
です！」

小柄男子が、まるで救世主を見つけたかのように歓喜の表情を浮
かべ、倉崎に助けを求めてきた。

「は、破壊神って、あの……」

「不良20人に囲まれても全員蹴散らして無傷だったり、バイクを
軽々投げつけたり、今まで折った人の骨は100本以上、奴が通っ
た跡は屍しか残らないっていう、あの……」

「この街最強の不良、破壊神倉崎！！」

自分が不良っていうのには同意しかねるが、20人やらバイクや
ら100本やらは本当だ。別にやりたくてやったわけじゃないのだ

が、通行の邪魔を取り除こうとした結果、そうなってしまった。

困んでいた三人は、破壊神の名を聞いて一気に縮み上がった。

自分より弱いものにしか威張ってこなかった彼らは、突如現れた自分よりも遙かに強大な男にすっかり怯えている。さっきまで自分たちがカツアゲをしていた少年がその破壊神に助けを求めたのだから、尚更だろう。

「破壊神さん、お願いします！ 助けてください！」

小柄少年は倉崎登場前とは一転し、水を得た魚のように生き活きとした。倉崎が自分を助けると信じきっている目だ。

しかし、倉崎はこの少年に見覚えがない。顔を見たことも声を聞いたこともない、完全に初対面だ。

だから倉崎は、素通りした。

テクテクと気急そうに、少年達を背に歩いていく。

それは、彼にとっては当然の行動だった。彼は下校途中ただけであって、見ず知らずの少年から助けを求められてそれに応じる筋合いはない。

そもそも、助けてくれとはどういうことなのか。少年をカツアゲしていた三人をぶん殴れということか？

だとしたら、彼はその力を持っていても行使することはない。彼は、自分に敵意を向けてきた相手にしか暴力を振るわないのだ。

それでよく破壊神の名が付いたな、と思うかもしれないが、彼は生まれつきの目つきの悪さやぶつきらぼうな物言いが災いして敵意を向けられる相手にはことには事欠かないのだ。そういつた輩に暴力を振るっていくうちに、いつの間にか破壊神と呼ばれるようになってしまっただけの話だ。

「えっ！？ 破壊神さん！ 待つてください！ どうして、どうして助けてくれないんですか？」

悲痛な叫び声が聞こえるが、無視した。彼を求めるその声でさえ、彼にとってはただの騒音に等しい。

（どうしてだつて？ 助ける理由がないからだ。それに、破壊神さ

んはないだろ破壊神さんは……)

倉崎は若干呆れ顔を浮かべ、振り返らずに歩いて行った。

とすると、水を得た魚になるのはカツアゲ三人組の方だった。彼らはあからさまにホツとした表情を浮かべ、

「夢川くん、何調子乗ってるのかな？」

「泣きついてんじゃねえぞこのヘタレが！」

「ビビらせやがってよ！」

口々に小柄少年を罵倒し始めた。そのすぐあと、人が殴られる鈍い音とか細いうめき声が聞こえたが、倉崎の心情に変化を与えることはなかった。

倉崎の帰路「2」（後書き）

あいまいっ！という兄妹ラブコメを書く傍ら、新連載を開始しました。

こちらのヒロインも、自分の趣味満載なキャラにしようと思っ
ています。

God Meets Girl .

あれから一週間後

倉崎は再び、廃ビル沿いの路地を歩いてきた。うだるような暑さから逃れるように、スタスタと自宅のアパートを指す。

今日の学校もひたすら退屈だった。こうして下校しているほうが、風景が見れる分まだ面白い。

もつとも、いくら退屈だからといって、不良に絡まれたいとはちつとも思っていない。彼はケンカに快樂を見出す性質は持ち合わせていないのだ。

もし仮に、彼が三度の飯よりケンカが好きなバリバリの不良少年だったのなら

今頃この街には、彼にケンカを売る不良など一人も残っていないだろう。ケンカ相手など破壊され尽くしているに決まっている。高校入学からわずか三ヶ月で、だ。それほどまでに、彼の強さは人間離れしているのだから。

そんな破壊神が歩きながら考えていることといえば

今日の夕飯のおかずである。

一人暮らしをしている彼には食事を作ってくれる親はいないが、三食コンビニ弁当という不健全な食生活はしていない。昼食以外はすべて自炊している。

昼食も、朝早くから自分で弁当を作って学校に持っていくのが面倒くさいだけで、休みの日は基本的に自炊だ。

(エビフライは一昨日喰ったし……、今日はハンバーグにすっか。ソースはケチャップか、それともデミグラか……)

意外に子供舌な破壊神が、そんな風に思案していたところ……

「死ね!!!」

背後から、甲高い声。

その声とほぼ同時に、彼の後ろから何者かが突進してきた。

殺意のこもった怒号。口先だけでないことは明確である。が彼はそれを、振り向かずにかわした。

ビニール袋が風に飛ばされるように、ふわりと。

その程度の芸当は、彼にとっては無意識下のうちに行える範疇のものだった。

彼は幼い頃からケンカを売られてきたが、当然その中には「不意打ち」というものも入っている。角を曲がったら鉄パイプ、ドアを開けたら金属バットなど、何回経験したシチュエーションだかわからない。

故に彼は、ただ歩いているときでさえ無意識のうちに警戒を張り巡らし、無意識のうちに襲撃に対応するよう、無意識のうちにインプットしていたのである。

そして、無意識のうちに反撃するようにも。

いつも通りに、目の前をうろつく蠅を叩くだけ。

それは今回も例外ではない。

突進をかわされ前につんのめった襲撃者の顔面に、容赦のない右ストレートを……

「っ！」

すんでのところ、彼は拳を止めた。

自らの意識でか反射的にかは微妙なところだが、拳は止められた。彼の拳からわずか3センチのところ、ギョツと目を閉じている襲撃者は……

どう見積もっても小学生くらいにしか見えない、小さな小さな少女だった。

年の頃は10〜12才といったところか。ウェーブのかかったふわりとした栗色のロングヘアをしている少女は、ロリータ調の服に身を包んでいて、西洋人形と見間違っような可愛いらしい外見をしている。

破壊神なら触れただけで壊れてしまいそうな、細枝のような少女の腕。その先には

鈍色にびいろの、ナイフ。

左右均整の形状で両側に刃の付いたダガーナイフが、少女の右手に握られていた。

「刃渡り5・5センチ以上の剣は国内じゃ銃刀法違反なんだがな。お前、何のつもりだ？」

少女が握っているナイフは、明らかに刃渡り5・5センチを超えていた。少なくとも刃渡り10センチはある。この年頃の少女が持つには、あまりにも似合わない武器だった。

もつとも、子供に似合う武器などあるのかは不明だが。

「うるさい！ 私はお前を殺す！」

少女は慌てて後ろに下がり倉崎から間合いを取った。そして、ダガーナイフの先端を倉崎に向ける。そのナイフも少女の体も、哀れみを覚えるくらいにガタガタと震えていた。

「殺す？ たたく何わけわからねえ宣言してんだよ。どんな決意だっつーの。だいたいなんで俺が殺されなきゃならねえ」

もつともな疑問だった。不良ならともかく、このような幼い少女に刃を向けられる覚えなど彼にはない。

彼の質問対し、少女は怒りで震えながら、ゆっくりと口を開いた。「…………お前が…………、お前がお兄ちゃんを殺したんだ！ だから私がお前を殺す！ そう決めたの！」

(お前がお兄ちゃんを殺した？ ……何を言ってるんだこのガキは) 倉崎は逡巡した。具体的な心遣りはないが、返り討ちにした不良共の中にもしかして死者がでていたのかもしれない。今まで考えたことはなかったが、それは十分有り得る話だった。

彼の拳は、棒立ちの状態からの体重を込めないパンチですら、人の骨にヒビを入れることができるほどの強度を誇るのだ。その拳はもはや、少女が握るダガーナイフ以上の凶器に等しい。そんなものをほぼ毎日人に向けていたら、死人の一人や二人でていてもおかしくはないのではないか。

(まあとりあえず…………)

バチンッ！

倉崎は一瞬で間合いを詰め、目にも留まらぬ速さで少女の手首をはたいた。

はたいたといっても、彼は人差し指の第一間接付近で掠らせるくらいのことしかしていないのだが、それで充分だった。

「痛っ！！」

ガラガラと、ナイフが少女の手から離れて地面を転がる。倉崎はそれを、少女が拾えぬように左足で踏み付けた。

「ガキがこんなものに向けんじゃねえ。危ねえだろうが」

倉崎にとっては、素人丸出しのへっぴり腰で構えられたナイフなど少しも怖くはない。過ぎた武器は自らへ返ってくる、危ないのはむしろお前の方だ、と彼は言いたいのだ。

手をはたかれ武器を失った少女は、その場に崩れ落ちうずくまっていた。赤く腫れ上がった右手首を左手で押さえている。

「……………うつつ、痛いよ……………」

痛いで済むのなら幸運だと思うべきだろう。破壊神にナイフを向けておきながら、まだ意識を保っているのだから。

今まで破壊神を襲撃した人間は、たいてい気絶するほどの反撃を喰らっているのだし、破壊神襲撃の代償としては安価なものである。「……………つたく仕方ねえ。おい、俺が誰を殺したって？」

事と次第によっては、彼は刑務所に行くことになるのかもしれないのだから、とりあえず少女から話を聞き出そうと考えた。

少女はキリリと倉崎を見上げ、怨みのこもった目で睨み、

「お前がお兄ちゃんを殺したんだ！ お前が、お前が……………、ヒ、ヒツク……………グスン……………」

とうとう少女は泣き出した。涙がボロボロと地面に零れ、嗚咽混じりの声になる。

「お前がお兄ちゃんを……………グスン……………見捨て……………だから……………、お兄ちゃん……………ヒック」

（見捨てた？ 殴り殺したとかじゃなく、見捨てただと？ それこ

そ覚えが……はっ!?)

覚えはあった。

一週間前、今彼が立っているのと同じ場所で……

彼は一人の少年を、見捨てた。

救世主を見つけたかのような顔をした、あの少年を。

悲痛な叫びを上げていた、あの少年を。

「お前が、虐められていたお兄ちゃんを見殺しにしたから……、お兄ちゃんは自殺したの! 全部……、全部お前が悪いんだ!」

(自殺……だと?)

少女の瞳に宿るのは、圧倒的な実力差を見せ付けた破壊神に対する恐怖すら超える、全てを燃やし尽くさんばかりの、黒い炎。怒りと憎悪と悲しみを掛け合わせた負の感情の塊が、メラメラと燃え上がっている。

「……もしかしてお前、一週間前ここでカツアゲされてた野郎の妹か何かか?」

「そうよ! この……、ひ、人殺し!」

「……アイツは、自殺したのか?」

「お前が見捨てたからね! お前が……お前のせいで……」

少女が吐き出す言葉は、倉崎を少なからず動揺させた。お前は間接的に人を殺したのだという糾弾は、変化に乏しい彼の顔を曇らせるくらいの効果はあったようだ。

「……ちよつと待て。「見捨てたから」? ……それはどういうことだ、詳しく説明しろ」

虐めを受けていたからならわかるのだが、見捨てたから、というのは一体どういうことなのだろうか。彼はうずくまる少女に疑問を投げ掛けてみた。

「お兄ちゃんは! ……破壊神のことを、ヒーローのように思っていたんだ。なのに……お前がお兄ちゃんを見捨てたりするから……、お兄ちゃんは、唯一の希望を亡くして……」

God Meets Girl・〔2〕

市内の高校で生徒が飛び降り自殺をした、という話を一週間前から倉崎は聞いていた。テレビや新聞で、ではない。クラスメイトが会話しているのを聞いて知ったのだ。

彼はテレビも持っていないければ新聞も購読していないので、世間のニュースには疎い。

故に、彼は自殺したという少年の顔も名前も知らなかったのだが……

「おい、ヒーローってのはどういうことなんだよ。俺はそんなもんになつたつもりは一度もねえんだけどな」

とは言つても、英雄視されるのはこれが初めてではない。

今まで彼が倒した不良の中には、大勢の人間から怨みを買つていたり周りに害を振り撒く極悪人もいたので、一般市民の中には彼に感謝している者も少なからずいた。

まあ、直接感謝を言ってくる人間は小数だったし、通行の邪魔を取り除いたというだけの認識しかない倉崎は、不良を倒したことを感謝されても嬉しく感じたことはなかったのだが。

「お兄ちゃんは……お前が不良絡まれている女の子を助けていたのを見て、お前に憧れていたのに……。それに、お前は不良にしか手を出さない正義の味方なんでしょ!?」
なのに、何でお前はお兄ちゃんを助けてくれなかったのよ……」

（女の子を助けた? ……ああ、そんなこともあつたっけな。成り行きだけだよ）

今まで倉崎が英雄視されることがあつたその理由は、実はもう一つある。倉崎は、自分に攻撃してきた相手にしか暴力を振るわないからだ。

彼は、暴力を振るうことに罪悪感がない。だが、暴力に快楽を見出だす趣向も持ち合わせていない。彼はあくまで正統防衛をしてき

ただけなのだが、そのほとんどの相手が不良共だった、というだけの話なのだ。

(ったく、どいつもこいつも何勘違いしてんだか)

「……いいか小娘。俺は、正義の味方なんかじゃねえ。通行の邪魔をしてくる小石を退けてきただけだ。てめえの兄貴とやらにヒーロー扱いされるほど立派じゃねえんだよ。」

この間だつてそうだ。てめえの兄貴をカツアゲしてた野郎は、別に俺に絡んできたわけじゃねえ。だから助ける義理もぶつ飛ばす理由もなかったんだよ。それくらい分かれ」

地面にへたりこんでいる少女に向けて、彼は容赦のない言葉を投げ落とした。

「なっ 何よこの嘘つき！ 偽善者！」

「嘘ついた覚えもねえ。てめえらが勝手に勘違いしてただけだつたの。だいたい俺が偽善者なら、今ここでてめえに謝ってるわ」

(おかしい)

「だったら謝りなさいよ！ お兄ちゃんの遺骨の前まで行って、土下座して頭地面に打ち付けて謝りなさいよ！」

「ざけんなクソガキ。てめえの兄貴が勝手に勘違いして、勝手にカツアゲされて、勝手に自殺しただけじゃねえか。んな勝手な都合に無関係な俺を巻き込むんじゃねえ」

(何でだ？)

「酷い……。お兄ちゃんを……。お兄ちゃんを返せ！」

「返せも何も、奪った覚えがねえ。兄貴を虐めていた野郎共に言うんだな」

(俺は何で、こんなにコイツに話し掛けてんだ？ 俺は何で、こんなにイライラしてんだ……？)

そもそも、暴力を振るうことに罪悪感を感じることがないはずの彼が、自分を刺しにきた相手を殴り飛ばしていいことが不思議なのだ。彼は殴る寸前で拳を止めたし、ナイフを叩き落としたのだった。少女の身を案じてのものだった。

通行の邪魔をするものがいれば取り除くだけ。たまたま今回は、兄貴の自殺がどうのこうのと言われたので、多少話を聞こうと思っただけなのだが……

（俺が甘いのは、相手がガキだからか？ 破壊神と呼ばれてようが、所詮俺も人の子か……）

とりあえず倉崎は、そうやって自分を納得させようとしたのだが

……

「お兄ちゃん……お兄ちゃん……。何で死んじゃったの……？ 会いたいよ……」

少女の目から、大粒の涙。

アスファルトの上に水溜まりができてしまっんじゃないかというくらい、ボロボロと零れ落ちる。

チクリ。

何かが、倉崎の胸に刺さった。

それは、今彼が踏み付けているナイフよりも鋭利で

「お兄ちゃん……お兄ちゃん……」

グサリ。

彼が今まで経験したことのないような痛みだった。

（くっだらねえ……）

彼はそれを認めなかった。

認めたくなかった。

認めたらきつと、後悔することになるだろうから。

「いつまでも泣いてんじゃねえぞ、クソガキ。こんなもんで俺を殺せろと思うなよ」

彼は踏み付けていたナイフを拾い上げ

ボキン。

刀身をへし折った。

これで会話は終わりだ、とでも言うように。

「二度と俺の前に現れるんじゃねえ。それから、人を失う痛みを知ってるなら人を殺そうとすんじゃねえ、クソガキが」

彼は二つに分断されたナイフを通学鞆に放り込み、
「次人を殺そうとしたら、容赦なく壊す」
逃げるようにその場立ち去って行くのだった。

やはり、何かがおかしい。

God Meets Girl・〔2〕(後書き)

三人称の文体は、やっぱりまだ慣れないです……

くだらないこと

ゆめかわけ
夢川翔、15歳。

市内の高校に通う高校1年生。

校舎の屋上から転落して死亡、遺書等は見つかっていない。

状況からして自殺の可能性が高いが、警察は事故と事件の両面で捜査中。

これが、倉崎がケータイのニュースサイトを通して得た情報である。

事件現場となった高校が、倉崎の自宅からさほど遠くないところにあったのは意外だった。自分の世間知らずの程度に、流石に呆れもした。

（この街の治安はどうかしてる。わざわざここで一人暮らしするんじゃないかったか……）

倉崎がパツと見てみた限りでも、この街周辺ではここ一週間で二ユースに取り上げられるような事件が四つも起きていた。

連続通り魔事件、連続放火事件、引ったくり事件、そして転落死事件。

通り魔事件は、夜中人気のない道で老若男女問わず刃物で切り付けるといったやり口らしく、犯人はまだ捜査中。すでに6人が犠牲となっている。

連続放火事件は、これまた夜中に犯行が行われ、一軒家が三棟被害に遭っている。こちらも、犯人はまだ捜査中。

引ったくり事件は、夕方歩道を歩いていた四十代の主婦が、車道を走り抜けたバイクに鞆を引ったくられたという概要だった。こちらも、犯人はまだ捜査中。

そして転落死事件

こちらはまだ、自殺と確定されたわけではない。

状況は限りなく自殺に近いが、自殺をする決定的な理由が見つか

らないからだ。

(どういうことだ？ 虐めが原因じゃなかったのか？)

少年が虐めを受けていたなどということは、倉崎が読んだ記事には書いていなかった。てつきり虐めを苦に自殺したのだと考えていた彼に取っては予想外のことである。

とすると、昨日の少女が言っていた『自分が信じていた破壊神に裏切られたから』という理由が現実味を帯びてきた。

そんな馬鹿な理由は少女の勘違いに過ぎないと思いたかった彼であるが、虐めやカツアゲが直接の原因でないとすると、そう考えるのが打倒であろう。

小学生くらいの少女が、彼が原因だと言い彼をナイフで殺そうとするくらいなのだ。やはり信憑性は高いだろう。

「……だからって何だってんだ。俺には関係ねえだろ」

自分は何もしていない。

故に、何も悪くない。

彼は自分にそう言い訳をしていた。言い訳をしなければならぬ程には、思い悩んでいた。

「勝手に死んでった奴のことなんか知るかつつーの。あのガキもあのガキだ。逆恨みも良いところじゃねえか。」

まあ、あんだだけやつとけばもう襲ってこねえだろうがよ……」

そう、自分には関係のない話。

お前が原因だと突き付けられたから少し調べてみただけ。

もうこの話はおしまいだ。これ以上面倒事に巻き込まれるわけにはいかないし、関わりたくもない。

少年に罪悪感など感じていない。悪いことなどしていないのだから。

少女に怒りを抱いているわけでもない。襲撃を受けることなど慣れきっているのだから。

忘れよう。

何を？

助けを求めてきた少年の悲痛な叫びも、後にその少年が自殺をしたというこも。

兄の敵討ちと言わんばかりに自分をナイフで刺しにきた、幼い少女のこも。

『お兄ちゃん……お兄ちゃん……。何で死んじゃったの……？ 会いたいよ……』

頬を伝って流れ落ちた、少女の涙も。

それを見たとき彼の胸に刺さった、正体不明のナイフのこも……

それはあまりにも馬鹿馬鹿しく、彼にとってはまったく意味を持たないこである。

くだらない。無意味で無価値で無味乾燥。自分には不要なこだ。

「くっくだらねえ」

気がつけば、ハアアアとわざとらしいため息をついていた。

「くっくだらねえ。本当にくだらねえよ。」

……で、俺は何くだらねえことしてんだ？」

彼が住んでいるアパートの近所の、廃ビル沿いの道。

学校も終わりすんなりと自宅へ帰るはずだった彼は今、家とは逆の方向へと歩いている。

彼は

先週少年をカツアゲしていた三人組を、後ろから尾行していた。

それはあまりにも馬鹿馬鹿しく、彼にとってはまったく意味を持たないこである。

くだらない。無意味で無価値で無味乾燥。自分には不要なこだ。

そのはずなのに。

“ 狐狩獵犬（フォックスハウンド） ”

三人組は、廃ビル沿いの通りを抜け、車が行き交う大通り沿いの歩道へと出た。横一列に並んでペチャクチャと会話しながら、歩を進めて行く。

倉崎はその数メートル後ろを、三人組に気付かれないように注意深く歩いていた。

自分が何をしたいのか、彼にはわからない。下校途中に三人組を見つけたときから、体が勝手に彼らを追うのだ。

「ほつときゃ良いのによ。あいつらも、あの馬鹿な兄妹も」

だが、自宅とは逆方向に踏み出す脚は止まらない。

まるで自らアリジゴクの巣へと向かう蟻のように、彼は自ら災厄へと脚を踏み入れて行く。

三人組は、道路沿いにあるファミレスへと入っていった。それを追うように、倉崎も店内へと入って行く。

洋風の内装をした店内を見渡すと、三人組の姿はすぐに見つかった。窓際のテーブル席に座って、メニュー表を開いている。

倉崎は真っ直ぐ、彼らの座るテーブルへと向かった。程なくして、彼らのうちの一人が倉崎に気付き、顔を青ざめた。

「は、破壊神倉崎……」

「は？ お前何言って……って！」

「なっ!？」

残りの二人も気付き、同じく顔を青ざめた。全員が倉崎の存在に気付いたときには、彼はすでに三人組が座るテーブルの目の前に立っていた。

「よお、ちよつと良いか？」

「な、ななな何の用で、しょうか？」

倉崎は努めて穏便に話し掛けたはずなのに、三人組は震えあがった。この街最強の不良と呼ばれる存在への潜在的な恐怖ももちろん

あつたのだが、目つきの悪さや低くぶつきらぼうな声に加え、無意識にじみ出ている不機嫌さに言い知れぬ圧迫感を感じてしまっているのだ。

「おいおい、ヤベーよ……」

「やっぱ、こないだのアレのことか？」

ひそひそと、倉崎に話し掛けられる原因を模索している彼らに、倉崎は無表情で用件を伝える。

「別に何もしねーから安心しろ。ちょっと聞きたいことがあるだけだ」

「は、はい！」

「ったく、そんな畏まるなよ。……端的に言う。この前お前らが力ツアゲしてた野郎がいるだろ。あいつが自殺した原因は、お前らか？」

「ち、違います！ 違うと……思います！」

「そ、そうだよな！？ だって……」

「俺らが夢川に絡んだのって、あれが初めてなんですから！」

「初めてだあ？」

「はいい！」

倉崎は単純に聞き返してみただけなのに、再び三人組は震え上がった。

「ほ、本当なんです！ 金が欲しくて、たまたま道であつた夢川に借りようと思っただけで！」

「あれ以降そーゆーことやっていないし、俺達が原因なわけないっす！」

三人組が嘘をついているようには、倉崎には思えない。完全に倉崎に怯えているうえに、三人全員で事情を説明しているからだ。もし、とつさに嘘をつこうとしたのなら、三人の息がこうまで合はずがない。

「わかった。お前らが原因じゃねえんだな。

……じゃあ聞くけどよ、あいつが自殺した原因だか理由だか心辺

りだか、なんか知らねえか？」

倉崎の質問を受け三人組は、いかにも必死で考えていますといった表情を見せた。

「別に、虐めを受けていたって話は聞いてないし……」

「お、俺ら、夢川とはクラスも違うし今まで全然話したことなかったんですけど、あいつの家すげえ貧乏だって話を聞いたことがあるような……」

生活苦を苦に自殺。

はたしてそれは、世の高校生の自殺の理由としてはどれほどの割合を占めているのだろうか。倉崎にはわからないが、学生の自殺「虐めが理由という先入観を持っている彼には、あまり多くはないよな気がした。

「でも、俺ら実際全然わからないっす！ 夢川が自殺した理由探るのが学校で流行ったんですけど、結局全然わかりませんでしたもん！ どうやら、ニュース記事を読んだ通り、自殺の理由ははっきりとしていないらしい。

「ああそうかい。……で、お前らはその“貧乏な”夢川くんにカツアゲしていたわけだ」

彼は何の気無しに言ってみただけだった。

悪意も敵意も責める気もなく、ただなんとなく呟いただけ。しかし……

「す、すすす、すみませんでした！」

「許してください！ ちょっと調子に乗っていただけなんです！」

「そ、そうです！ 俺ら、“狐狩獵犬”の会員費稼ぐために仕方な

く……」

「ば、馬鹿お前っ！」

仲間にもそう突っ込まれ、“狐狩獵犬”の名を口にした一人は、「

しまった！」といった顔をした。

「“狐狩獵犬”だあ？」

「ひいっ！」

フォックスハウンド
“ 狐狩獵犬 ”

倉崎はその名称を聞いたことがあった。

『 倉崎てめえ、俺達 “ 狐狩獵犬 ” フォックスハウンド ナメてつと痛い目見るぞコラ！ 』

この街に来てからこういつた輩に喧嘩を売られたことは、一度や二度じゃない。 “ 狐狩獵犬 ” フォックスハウンド 以外の名前を名乗る連中も大勢いた。

もつとも、連中が言う「痛い目」とやらを彼が見たことはまだないのだが。

それに、彼は “ 狐狩獵犬 ” フォックスハウンド という名称は知っていても、それがどういふものなのかは知らない。この街に蔓延 はびこ るただの不良グループなのだろうという予想は立てているのだが。

「す、すみませんすみません！ “ 狐狩獵犬 ” フォックスハウンド って言っても、俺ら入りたてで下っ端の下っ端の下っ端の、ほとんどパシリみたいなものなんです！」

「だから「狩る」のだけは勘弁してください！」

「……俺は別に、不良を「狩る」趣味なんてねえんだが……」

獵犬を名乗る輩が、倉崎に「狩られる」のを恐れているのは、なかなか滑稽だ。不良組織に入っても所詮この三人組は小物なのだなど、彼は呆れた。

「つたく、喧嘩売りにきたわけじゃねえって言ってんだろ。」

「……つてか、お前からあの時、ゲーセンに行きたいから金寄越せって言ってなかったっけか？」

倉崎は、これまた、何の気無しに聞いてみただけだ。

だが、三人組に対する嫌悪感が少々混ざっていたのは否めない。

その、微妙にブレンドされた嫌悪感だけで、三人組の恐怖は臨界点に達した。

「……これで勘弁してください！」

三人組は一斉に立ち上がり、彼の前に財布を突き出し、深々と頭を下げた。

「金はお返しします、だから命だけは……」

「……いやだから、俺に返してどうす……」

「失礼しました！」

そう叫ぶと、三人組はドタドタと慌ただしくテーブルから走り去り、勢いよく店を飛び出した。

「……この街には馬鹿しかいねえのか？」

テーブルの上に置き去られた三袋の財布を眺めながら、割と本気で、彼はそんなことを考えてみた。

偶然の再会？

ファミレスを後にした倉崎は

三人組が置いていった財布の処分について、悩んでいた。

交番に届けるのは面倒だし、かといってカツアゲ被害に遭っていた少年に返そうにも、少年はもう死んでいる。

ならば、少年の遺族に返す……

「アホか。そっちのほうが面倒だ」

奴の妹に会うかもしれないのだ。冗談じゃない。

二度と俺の前に現れるんじゃないやねえ、と言っておきながら、自分から会いに行つては本末転倒だ。

第一、自分が借りたわけじゃない金を律義に返しに行くほど彼はお人よしではない。

とすると……

「金だけ抜き取つて、財布はそこら辺に捨てるか」

それが妥当な判断だろう。

彼とて裕福なわけではない。慢性的に金欠なのだ。ここはラッキ―だと考え、もらつておくのが最良だろう。

彼は当然のようにその結論に達し、財布から金を取り出そうとしながら、廃ビル沿いの通りへと続く道角を右へ曲がると……

「……………」

「……………っつ！？」

曲がったところで、見覚えのある人物に遭遇した。

無言で棒立ちになった倉崎に対し、驚いてのけ反つたその人物は、どう見積もっても小学生くらいにしか見えない、小さな小さな少女だった。

年の頃は10〜12才といったところか。ウェーブのかかったふわりとした栗色のロングヘアをしている少女は、ロリータ調の服に身を包んでいて、西洋人形と見間違ふような可愛いらしい外見を

……
「何してんだお前」

その少女は、昨日倉崎を襲撃した少女と同一人物であった。

「お、お、お、お前！ な、何でこんなところに！」
驚きと怯えが混ざったような顔で、少女は後ずさりした。

その手には昨日のようなナイフなども握られていない。どうやら再び倉崎を襲撃しようとしたのではなく、偶然遭遇しただけのようだ。

「いやまあ、俺の家この近所だしよ。……ってか調度良いや。この財布なんだが……」

ダッ！

少女は踵を返し、スカートを翻しながら、脱兎の如く駆け出した。
「おい、待ってって」

だが待たない。
立ち止まったら殺される。

そんな脅迫概念に追い立てられるように、倉崎に背を向けたばかりですら走り抜けた。が、

「待ってって言うてんだろクソガキ」

「!?!」

その声はなんと、猛ダッ・シュ・を・し・て・い・る・少・女・の・前・方・か・ら・発・せ・ら・れ・た。
慌てて急ブレーキをかける少女。

目の前には、少女の背後にいたはずの倉崎が、若干不機嫌そうな顔を浮かべて、後頭部を手で掻きながらけだるそうに突っ立っていた。

「嘘!? え? だって……」

少女は、倉崎がレポートでも使ったかのように錯覚した。

だが、何のことはない。倉崎は少女の進行方向に走って回り込んだだけだ。

その速度があまりにも速かったため、何が起こったのか少女は理

解できなかったが。

破壊神と呼ばれる倉崎は、暴力だけではなく運動能力全般に優れている。人知を超えた身体能力は、実のところ喧嘩以外でも応用はきくのだ。

もつとも、喧嘩以外と言っても、学校に遅刻しそうなときに猛ダツシユをするくらいしか普段の使い道はない。

「うつつ……殺るなら一思いに殺りなさいよ！ ば、化けて出てやるんだから！」

あくまで強気に開き直った少女。だがその目元は潤んでいる。

「はあ？ なに言ってるんだお前は。別に取って喰ったりしねえよ。

……ほら、コレ」

倉崎は手に持っていた財布を差し出した。

「お前の兄貴をカツアゲしていた野郎のだ」

ポカンとした顔を浮かべた少女に、彼は通学鞆の中からさらに財布を二つ取り出して少女に突き付けた。

「……はあ！？ どーゆーこと！？ お金取り返してきたってわけ！？」

「まあ、そんなところだ」

三人組が勝手に財布を置いていっただけなのだが、面倒なので細かい説明は省いた。

「ほら、受け取っとけ」

しばらく迷った後、少女は倉崎の手から財布を引ったくり、

「こ、こんなんで赦してもらおうなんて甘いんだからね！ アンタのこと、絶対絶対絶対に赦さないんだから！」

倉崎をキリリとした目で睨み付けた。

もちろん、そんなものに臆するはずもない倉崎は、

「なあ、お前の兄貴の自殺の理由って、本当に俺なのか？」

いたって冷静に、もつともな疑問をぶつけてみた。すると少女は間髪入れずに、

「この腐れツリ目！」

彼を恫喝した。

「く、腐れツリ目……だと?」

ヒクヒク。

変化に乏しいはずの彼の顔が、わずかに引き攣った。

「アンタツリ目のくせに眼球が腐った魚のようなのよ! ホント気味悪いわ! それにこの、陰険ボサボサクルクル頭!」

「ク、クル……!?!」

ワナワナと、彼は怒りで小さく震えた。

ちなみにクルクルとは、彼の髪のことを指している。この生れついでに強烈なくせつ毛は、彼にとっては無視できないコンプレックスであるのだが、少女はそれに触れてしまった。

「……おいガキ。今のは聞かなかったことにしてやるから、俺の質問に答える」

これは騒音コレは騒音、キレてもこつちが疲れるだけ……

なんとか堪え、一段と不機嫌になりながらも、彼は再び問い掛けた。

「お前、お兄ちゃんの言うことが信用できないってゆーの!?! やっぱり死ぬべきよ、万死に値するわ!」

「信用っていうのは相手のことをよく知っていないなきゃできねえもんだ。で、俺はアイツのことをまったく知らないわけだが」

「うるさい! とにかくお前のせいなんだから! ……だって、お兄ちゃんの遺書にそう書いてあったんだもん!」

「……ちよつと待て、お前今何て言った?」

「あつ、しまつ……」

少女はあからさまに狼狽し、慌てふためいた。

「遺書はなかったんじゃないのか? どういうことだ」

「え、えーつと……」

少女は、何かをごまかそうとするときの癖なのだろうか、ウエーブのかかった栗色のロングヘアの毛先を片手でクリクリといじり始めた。

謎の遺書、遺書の謎

「詳しく聞かせてもらおうか。じゃないと……」

「……じゃないと？」

「とりあえずお前をシバく」

その瞬間、少女の顔からサーッと血の気が引いていった。

「はあ！？ お前、しょしょよ、小学生相手に何、何考えてるのよ！」

辛うじて虚勢を張ってはいるものの、少女はガタガタと震え始めた。

破壊神だということを除いても、相手は高校生の男子である。年の離れた小学生の女子では太刀打ちできるはずもない。逃げようにも、脚力が違い過ぎて難しいだろう。確実に捕まる。

「し、仕方ないわね。お前が謝ったら教えてあげても良いわよ」
だが少女には、意地があった。

頑固になるだけの、理由があった。

が、

「すまなかった」

倉崎にはなかった。

「……ええ!？」

彼は謝った。しかも、頭を下げた。

「とりあえず、お前の兄貴がカツアゲされてたときに助けなかったのは謝る。だがよ、お前の兄貴が死んだ理由はどうしても納得できねえんだ。だから、何か知ってるなら聞かせてくれねえか？」

卑怯だな、お前。

彼は心の中で、自分自身を^ゆ擲した。

（すまないなんて思っちゃいねえ。けど、頭下げるだけでいいなら安上がりだ。面倒くさいことに首突っ込んでしまったが、俺みてえな暇人には調度良い娯楽になりそうだからそのまま突っ込み続けて

やるだけだ。別にこのガキの力になってやりたいわけじゃねえ)
たまたま道端に漫画雑誌が落ちてるから、とりあえずページをめ
くってみるか。つまらなかつたらすぐに捨て置けばいい。

そのようなノリで首を突っ込んでみただけなのだと、彼は思い込
んでいた。

一方少女は、鳩が豆鉄砲喰らったような顔をしていた。倉崎が頭
を下げて謝るなど、彼女は微塵も想定していなかったのだから。

「お前何なのよ……。この前は、無関係な俺を巻き込むとか言っ
てたくせに……」

「気が変わった。話、聞かせてくれねえか？」

「しょ、しょうがないわね……。お前みたいな極悪非道日陰男は、
これで悔い改めなさい！」

悔しそつに歯ぎしりして、倉崎の目つきの悪さにも負けなくら
いの眼光を放つと、少女は事の顛末てんまつを語り始めた。

「なるほど。俺のことを英雄扱いしていたお前の兄貴は、一週
間前に校舎から落ちて死んだ。その次の日、お前は兄貴の友人を名
乗る男から、兄貴がお前に宛てて書いたつー「遺書」を受け取っ
た、と」

「そつよ。この「遺書」のことは誰にも言うなって書いてあったか
ら……」

遺書の中身はこうだった。

学校では日常的に虐めを受け、精神的に限界の状態だったと
いう少年は、いつか破壊神が自分を助けると信じて生きてき
た。

だが、自分の憧れで尊敬の対象で心の寄り所だった破壊神は、目
の前でカツアゲの被害に遭っていた自分を見捨てた。

誰も自分を助けてくれない。

正義の味方にすら、自分は嫌われている。

僕なんか死ねば良い。

破壊神なんか死ねば良い。

僕は自分で死ぬから、誰か破壊神を殺してくれ。お願いだ。

そう書き連ねて、絶望した少年は自ら死を選んだ。

遺書を入れた封筒の中に、倉崎の顔写真と倉崎の住所を書いたメモと、鞆に納められたダガーナイフを入れて

「ハアアア」

倉崎は、かつてないほど大きなため息をついた。生じた脱力感のまま、肩を落とす。

「お前、馬鹿だろ」

「なっ！ 何ですって！ このク、ククククソ野郎！」

「女がクソとかいう言葉使ってんじゃねえよ、下品だろうが。つか、お前は本当に馬鹿だな。お前を指す代名詞を「馬鹿」にしたいくらいに馬鹿だわ」

散々「馬鹿」を馬鹿にした後、彼は一呼吸置いて、

「一般論的に言えば、兄貴が自分の妹に人殺しなんかさせるわけねえだろうが」

「あつ……！」

自分が書いたテストの答案が実は解答欄が一つづつズレていた、ということに気付いたときのような顔を、少女は浮かべていた。

単純なミスほど気付きにくい。

兄が死んだことがショックで冷静でいられなかった少女は、兄の遺書の内容を鵜呑みにしてしまっていたのだ。

「でも、確かにお兄ちゃんの字だったもん！ ちょっと震えていたけど、絶対にお兄ちゃんが書いたやつなんだから！」

「んなこと知るか。それよりも、お前の兄貴は妹にナイフ渡して人殺しを誘導させるようなやつなのか？ 遺書を兄貴本人が書いたとしても、怪しいのは遺書を渡してきた兄貴の友人とやらだろ」

「確かにそうだわ……」

「それによ、お前の兄貴が虐めを受けていたっていうのは事実なのか？ カツアゲしてた野郎は、お前の兄貴に絡んだのはあれが初めてだって言うし、奴らに聞いてもお前の兄貴が虐めを受けていたっつー話は聞いたことがないらしいし、ニュース記事だって虐めのことなんて書いてなかったぞ」

「バ、バれないように虐めていたとかじゃないの？」

「まあそうだとしても、だ。「誰か破壊神を殺してくれ」「この遺書のことは誰にも言うな」っつーのはなんか矛盾してねえか？ 誰かつーかお前に俺を殺させたいようにしか思えねえぞ、これ。とんだゲス野郎だな」

「お兄ちゃんはゲス野郎なんかじゃない！」

「なら、決まりだ」

彼は片手でボリボリと側頭部を掻き、

「兄貴の友人とやらを取っ捕まえて吐かせる、それしかねえだろ」

白馬に乗った破壊神

「協力……してくれるっていうの?」

「そう考えて良い」

しばらく互いに睨み合ったまま(といっても倉崎は少女と目を合わせていただけなのだが、傍から見ると睨んでいるようにしか見えない)、二人は沈黙した。

ジリジリと照り付ける太陽。今日も相変わらずの真夏日だ。

少女の額に、じわりと汗が滲んでゆく。倉崎も、不良共なんかよりよっぽどしつこく襲い掛かってくる夏空に眉をひそめた。

ミンミンミンミン……

蝉の鳴き声が鳴り響き、近くから聞こえてくるバイクのエンジン音と混ざり静寂を埋めた。

少女の汗が頬を伝い、アスファルトへと落ちる。それと同時に、少女は口を開た。

「わ、私は……」

ブオオオン!!

突如、空気を切り裂く轟音が少女の背後から鳴り響き、少女の言葉が掻き消した。

少女が驚いて振り返ると

20メートルほど向こうの角から出てきた大型のバイクが一台、猛スピードでこちらに向かってきた。

運転手はフルフェイスのヘルメットを被っていて顔が見えないが、がっしりとした体格から男だとわかる。肩にはなぜか女物のハンドバッグがかけられていて、遠心力で後ろへとなびいていた。

廃ビル沿いのこの路地は、車道と歩道の区別がなく狭い。当然のごとく、二人がこのまま突っ立っていたら轢かれる。

慌てて道を空けた二人の横を、廃棄ガスを撒き散らしながらバイクが駆け抜けて行った。

「待て、待てえええ！」

さらにその直後、バイクが走ってきた方向から叫び声がした。見ると、こちらへ向かって若い女性が一人、文字通りの『必死』を体全体で体现するかのようにママチャリを漕いでいた。

ブオオオン……

バイクは倉崎が少女と再会する直前に曲がった角を曲がり、大通りへと去って行った。

「待て……つってんだろクソヤロオオオがあああ！……『アレ』がないとアタシは……」

状況から察するに、女性は先程の男を追っていたようだ。だが相手はバイク。ママチャリで追いつけるはずもない。

女性は倉崎のすぐ近くでママチャリを止め、追うのを諦めがつくと肩を落とした。しかし、何かに気付いたのか直ぐさま顔を上げると、

「そうだ！ 警察警察……つて、ケータイがない！？ バッグの中じゃん！ ああもう、アタシのバカバカバカ！ 何でポケットに入れないのかな！？」

すぐに落胆し、ゴシゴシと頭を掻きむしった。

(なんだあ、この馬鹿みたいな金髪は……)

キーキーと金切り声をあげているこの女性は、顔こそ日本人だが、見事なロング金髪に見事な巨乳、スリムかつダイナマイトな体型の日本人離れなプロポーシオンをしていた。

街を歩けばモデルのスカウトなどいくらやってくるのかわからない。事実、自身が身に付けているブランド物のTシャツやブランド物のジーンズの魅力を完璧に引き出していた。

彼女とすれ違った男なら10人中9人は確実に振り向くだろう。

残りの一人はよそ見をしていて彼女に気付いていないやつだ。それほどまでに完璧な美人なのだが

「死ね死ね死ねえ！ 脳髄ぶちまけて死ねえええ！」

残念なことに、その顔は憤怒と後悔でヒステリックに歪んでいた。

金髪の女性はママチャリを降りると、胸部の二つの塊をゆっさゆっさと揺らしながら悔しそうに地団駄を踏み始めた。顔の血管は浮き出て、目は血走っている。もう色々台なしである。

「ああもう、よりによって『アレ』が入っているときに……………」
「てああ！ 破壊神じゃん破壊神！ やば、超ラッキー！」

女性はいつかの少年のように、倉崎の存在を視認するやいなや水を得た魚のように生き生きとした。

「ちょっとちょっと、さっきのバイク野郎追っかけてアタシのバツグ取り返してよ！ 引ったくりなの引ったくりい！ ああもう、ムカ・つ・くううう！」

「……………誰だお前？」

彼はこの女性に見覚えがなかった。

このような目立つ外見の女性と関わったならば、他人にあまり関心のない彼でさえさすがに覚えているだろうが、記憶の片隅をつついてみてもこの女性に関するメモリーは何一つ出てこない。

「細かい話は後！ とにかくアイツを追って！」

「だが断る」

「ほら自転車貸すから、頑張って！」

倉崎の拒絶を華麗にスルーして、彼女は自分が漕いでいたママチャリを押し付けた。

「……………おい女、俺は断るって言ったんだが……………」

「追い掛けなさいよ！」

そう怒鳴ったのは、先程まで倉崎と対峙していた少女だった。倉崎の顔を真っすぐ見つめ、強い口調で命令してくる。

「はあ？ 何でお前が……………」

「いいから！ とっとと追い掛けなさいって言うてるのよウスノロ！ お前日本語わからないの？」

「そうよそうよ！ 良いこと言っじゃないのキミ！ ほらほら、早くして、ね、お願いっ！」

女性は顔の前で両手をバシッと合わせ、ギョッと目をつむった。

「いや、追い掛けると言われてもな……」

(コレでかよおい)

押し付けられたのは、白銀に煌めく二輪の自転車。高級品なのだろうか、洗練されたボディをしている。

だがママチャリだ。

ギアが10段階もついていて、マックスギアでもいつきり漕げばかなりのスピードが出るだろう。そのスピードで漕いでもビクともしなそうな、威風堂々とした体躯をしている。

だがママチャリだ。

猛スピードで走り去って行ったバイクを追うなど、常識的に考えて不可能である。

「追い掛けなさい、さもないとアンタにこれ以上何も教えてあげないわよ」

(……) ったく、どいつもこいつも……。何で俺がそんなことしなきゃならねえ)

倉崎は、自分が面倒だと思ったことには関わらない。それが自分に危害を加えたり自分の利益になるようなことなら別だが、見ず知らずの他人のわけのわからない頼みに応える理由はない。

少女に関わろうと思ったのも、単なる暇潰し代わりだったはずだ。今すぐ別の暇潰しを探しに行っただって構わないのに。

「キリキリ動きなさいよひるあんどん昼行灯！」

何で少女がそこまで必死になるのだろう。倉崎にはわからない。

この金髪と知り合いなのだろうか、だから助けてやりたいのだろうか、それとも……

「……」 ったく、仕方ねえ」

彼はママチャリに跨がると、ゆっくりとペダルを漕ぎ始めた。

ふとももの筋肉が躍動し、ママチャリに息吹いぶきを注ぎ込む。

彼は一気にギアを10まで上げると、バイクが走り去った方向へ、先程のバイクを上回るスピードで駆け抜けて行った。

その瞬間、辺りに気流が生まれ、少女のスカートを押し上げピン

ク色の下着を露出させた。

だが少女は、それに気付く余裕もないほど、破壊神の姿に目を奪われていた。

破壊神は、常識すらも見事に壊してみせたのだ。

鮫島事件

「ふう……、上手くいったみたいだな」

金髪のグラマラスな女性からハンドバッグを引つたことに成功した鮫島はまじまは、バイクのスピードを緩めながら安堵した。

1年前の春、大学に通うためこの街狐原市に引っ越して来た鮫島は、引越しからわずか2日で“白虎連隊”びやっこれんたいと名乗る5人の不良にカツアゲされそうになった。

高校時代は野球部に所属していた鮫島は、別段喧嘩が苦手であったり気が弱かったりするわけではないのだが、さすがに不良5人をまともに相手にできるはずもなく、おとなしく財布を差し出してこの場をしのぐしかない諦めた。

しかしそこに、今度は“狐狩獵犬”フオックスハウンドの一員と名乗る一人の男が、鮫島を助けにきたのだ。

男は一瞬で“白虎連隊”の5人を蹴散らすと、鮫島に「フオックスハウンド 狐狩獵犬”へ入らないか？」と持ち掛けた。

男の話によると、“狐狩獵犬”フオックスハウンドは学生を主軸とする狐原市の自警団であり、増加する不良共から街を護るために有志のメンバーを募っているというのだ。

自分をカツアゲしてきた不良共にムカついたこと、勧誘してきた男が誠実で信頼できそうだったこと、何より自警団という響きにワクワクさせられたことで鮫島は、“狐狩獵犬”フオックスハウンドに加入することを二つ返事で承諾した。

それが全ての間違いだとも知らず。

加入から程なくして気付いた。自警団などというのは大嘘で、組織の実態はただの……いや、非常に統率のとれた大規模な不良グループだということに。

敵対グループへの襲撃など日常茶飯事、“狐狩獵犬”フオックスハウンドの名前を振

りかざし横暴を働く輩などざらにいた。

会員費と称し構成員から金を巻き上げる上層部、金を上納する代わり組織の後ろ盾を得て好き勝手に暴れる構成員。ヤンキー漫画で見た不良よりも過激で、極道映画で見た暴力団よりも恐ろしかった。

ここは自分の住むべき世界ではない。早く平凡な日常へと戻ろう。

加入から1年が経とうとしたある日、鮫島は組織を脱退するため、市内のとある金融業者から10万円もの大金を借りた。

脱退希望者は金さえ払えば、他の不良グループに入ったり組織に敵対するようなことをしない限り組織から手を出されないという。この規定がどこまで信用できるかわからないが、もう迷っていられなかった。

そして今の所、脱退してから2ヶ月経つが、組織からの干渉はない。平凡な日常を取り戻したかに見えた。

が、鮫島は今、別の地獄にいる。

鮫島が金を借りた先は、いわゆる悪徳金融というやつだったらしく、どんどんと利子が雪だるま式に膨らんでいった。

貯金を全て返済に宛て、学費も仕送りも取り立てに持っていかれ、それでもなお、7桁まで膨張した借金は返せそうになかった。

自宅のアパートへ毎日やってくる、厳つい顔をした黒服の男達。

その度に、頭を地面に打ち付けて謝罪する自分。

そしてその頭に、何度も何度も振り下ろされた真つ黒な革靴。

さらに、内臓を売れという非常に非情で非常に無慈悲な恫喝……

何故自分がこんな目に遭わなければならない、何故平凡な学生生活を送ろうと思っていた自分がこんな目に遭わなければならない、何故自分が、何故自分が……

こうして一週間前、鮫島は道を歩いていた主婦に盗んだバイクで引ったくりを働くことになる。

そして今回も……

「今日の女はたんまり持ってそうだったな。こりゃ期待できるぜ」
大通りの信号でバイクを停車した鮫島は、金髪女性のブランド物で固めた服装を思い出して期待に胸を馳せた。それにこのバッグもおそらく相当な代物だ。質しちに入ればそれなりの金になるだろう。
鮫島は、“狐狩猟犬”フォックスハウンド時代にもやらなかったような大胆犯罪を堂々とやり遂げたのであった。

罪悪感などない、感じてる余裕もない。後はこのバイクを棄てて逃げるだけだ。そして日を改めて、“狐狩猟犬”フォックスハウンド時代に習った（といつてもメンバーの一人に無理矢理教え込まれた）窃盗技術で別のバイクを盗み、再び引ったくりを繰り返す。潮時がきたら、引ったくりは止めて、今度は空き巣でもやって金を稼ぐ。それしか道はない。

「絶対に、内臓なんか売ってたまるか」

どんなにクズみたいな生活を送っていようが、死ぬのは絶対に御免だ。平凡な生活を取り戻して、平凡な幸せを手に入れるんだ。

鮫島は自らを鼓舞するように、オートバイのエンジンをブォォンと吹かした。

とそこで、彼は唐突に震えた。

それは何故？

恐怖を感じ取ったからである。

言い知れぬ恐怖。えもいわれぬ恐怖。ありえない恐怖。信じられない恐怖。蛇に睨まれた蛙が感じるような恐怖。

首筋に鎌を突き付けられているかのような恐怖……

「よお。すまねえが、そのバッグ返してくれねえか？ つつても俺のモンじゃねえんだが……」

その声ができるほうに、鮫島はフルフェイスのヘルメットで覆った顔を振り向かせた。

鮫島が乗っているバイクの左斜め後ろには、鮫島に“狐狩猟犬”フォックスハウンド脱退を最終的に決意させた存在が

「ひ、ひいつ！ 破壊神倉崎！」

白銀に煌めくママチャリのサドルの上で、蛙どころか蛇ですら射殺せそうな鋭い眼光を放ち、堂々と鎮座していた。

戦慄のバイクレース

倉崎の存在を視認した瞬間、鮫島はバイクのアクセルを全力で踏んでいた。

まだ信号は赤だったが、構っていられない。生物としての生存本能が、“圧倒的な存在”の前から今すぐ駆け出せと、サイレンを鳴らしているのだ。

（死ぬ……死ぬ死ぬ死ぬ殺される！ いったい何が何だっただちクショー！）

鮫島の脳内は、『倉崎の登場』という唐突の危険事態に直面し、ミキサーで掻き混ぜられたかのようにぐちゃぐちゃになってしまった。倉崎が自分に話し掛けてきた理由、その内容、その意味。これら全ての項目を度外視し（というより考察する余裕もなく）、鮫島はただ“生きたい”という欲求のみに従った。

”逃げたい”ではなく、“生きたい”。

それは、倉崎の拳を喰らったことがある者の多くが、再び彼に遭遇した場合に抱く共通の願望である。

実際に負った怪我の大小は、関係ない。

”死”を喚起させる絶対的な恐怖、強大さにこそ、生涯拭えることはないであろう”心的外傷”を負うのだ。

その”心的外傷”が起爆材となり、彼のバイクを爆走^{はし}らせる

前を走る軽自動車、ミニバン、トラックの隙間を、針を縫うかの如く滑らかに疾走する鮫島。生命の危機が彼の脳にアドレナリンの過剰分泌を促し、奇跡的なまでのドライビング・テクニクを可能にしたのだ。

もちろん、元来彼が持つテクニクも無視できない。バイクで引

ったくりを計画するほどののだ、その腕前は中々のもの。

元々バイクが好きであり（自分のバイクは借金の形に売り飛ばしてしまったが）、休日は峠を爆走るのが趣味だった鮫島は、趣味が命を救う希望になった僥倖に感謝した。

といっても、趣味を犯罪に悪用しなければこうして追われることもなかったのだが。

風を斬り、エンジンの咆哮を上げ、鮫島を乗せたオートバイは直走る。信号も法定速度も爆走することのリスクも無視して、ただひたむきに。

が

鮫島は、理解していない。

倉崎の”用件”から考えれば、このまま猛スピードでバイクを爆走らせるのと倉崎の”用件”に対応すること、どちらが危険かということを。

「うわあああ！」

無我夢中で、ハンドルを切った。

目の前には、中学校の制服に身を包んだ少女が一人。信号を渡ろうとする途中だったようだ。自分に猛スピードで向かってくるバイクに、泡を喰ったような顔をしている。

「キヤーツ！！」という少女の悲鳴が、彼の鼓膜をつんざく。

キキー！

アクセルを弱めつつ、ブレーキをかけながら、鮫島は奮闘する。

地面とタイヤが擦れ合い、火花を散らし、辛うじて 鮫島は少女をかわした。幸いにもバイクを転倒させることなく、再び爆走を続ける。

「あつつつぶねー！ けど……イケる！ 逃げ切れるぞ！」

先の成功で根拠のない自信を獲得した鮫島は、次の瞬間に、驚愕した。

バイクのサイドミラーに映る、鮫島の10メートルほど後ろを走

る白銀のボディが、先程の少女の上を、飛び越えたのだ！

「んなバカな！！」

鮫島はそれこそ、驚愕の”愕”の字のように、顎を震わせた。

ありえない！

映画のアクションシーンが、こんな街中の公道で起こってたまるか！

だが、サイドミラー越しに見たその光景　少女の背丈の上を1メートルほどの余裕を持って飛び越えたママチャリ　は、紛れも無い現実だ。平然と地面に着地し、そのママチャリを、ペダルが見えないほど高速で漕ぎながら、再び自分を追ってくる破壊神も、現実。

「来るな！　く、来るんじゃねえバケモノ！」

前方を向きながら、鮫島は腹の底から叫んでいた。だが、その命令も虚しく、鮫島と倉崎の距離はどんどん縮んでゆく。

10メートル、5メートル、3メートル……………

そしてとうとう、手を伸ばせば届いてしまいそうなほど近くで、

大型のオートバイと白銀のママチャリは併走することとなった。

「ハアハア……………おい……………鞆よこせって……………言ってる……………だろうが……………」

…ハアハア……………」

白銀に跨がる倉崎は、時速100kmの速度を維持してはいるが、表情は険しく、ついでに息も切れている。顔からほとばしる汗が、肌から離れ、いくつもの小さな水の雫となり後方へ消えていった。赤く蒸気したその顔は、彼が今までに消費したカロリー量を如実に物語っていた。

鮫島は、僅かに、ほんの僅かに、安堵した。

(よかった……………、疲れてる)

人間の身体能力、人体力学、限界、常識。その全てを、ことごとく”破壊”してみせた倉崎。その倉崎が自分を追っているという、あまりにも苛酷で恐ろしい状況にあった鮫島は、倉崎が”疲労して

いる”という単純な事象にさえ安堵してしまう。次第に感覚が麻痺していつてるのだ。

鮫島の脳は、倉崎に既存の常識を破壊されたが故に、倉崎に対する新たな常識を構築した。

すなわち、”破壊神^{バケモノ}”。

映画や漫画や小説で描かれているような、人間とは完全に別種のバケモノ。

比喩表現ではなく、本物のバケモノ。

かつて倉崎と対峙したときは、倉崎のあまりの強大さに現実感を伴うことなく敗北したが、今再び対峙するにあたって、鮫島は倉崎に対する認識を、”人間離れたバケモノ”から、”完全に人間ではない、ドラゴンや鬼と同一平面のバケモノ”と改めざるを得なかったのだ。

戦慄のバイクレース（後書き）

ルビをふっているのですが、お手持ちの機種では読めないかたもいるのでしょうか？

もしルビがふられていない方がいらっしやいましたら、お知らせください。お願いします。。。

とある喫茶店での話し合い

やがて、つかの間の安堵は終わりを迎えた。

鯨島の左側を併走する倉崎が、鯨島の鞆に向けて手を伸ばした瞬間、彼は自分の死期が近づいたような感覚に、心の底から震え上がった。

「来るんじゃない！」

鯨島は、自身が着ているジャケットのポケットから金色のライターを取り出し、倉崎の頭部目掛けておもいきり投げ付けた。この速度下では正確に狙いを付けるのは難しいのだが、鯨島と倉崎の距離が近かったこともあり、ライターは倉崎の側頭部に命中し鈍い音をたてた。

が、倉崎は動じない。

まったく意に介さず、鯨島の鞆へと手を伸ばしてゆく

「鞆……返せて……言っただらろが！」

「ひいっ！」

初めて聞いた、倉崎の怒鳴り声。洞窟の奥に住む魔物が咆哮したような、低くドスの聞いた声が空気を震わす。

さらに、見てしまった。

倉崎の、それだけで人一人殺せるのではないかと思ってしまう、鋭く睨みつけてくる、眼を。

かつて鯨島が味わったことのある、人を人とも見ていない、道端の小石やそこら辺を飛び交う虫ケラ程度にしか彼を見ていない、眼差しを。

「来るなあああ！」

鯨島は、辛うじて『鞆を返せ』という言葉を理解し、金髪の女性から奪ったハンドバッグを倉崎の顔面目掛けて投げ付けた。

「死ぬよおおお!!! バケモノオオオ!!!」

魂核から叫んだ願いは、フルフェイスヘルメットの中で反響

するだけ。

倉崎はいとも簡単に、片手でハンドバッグを受け止めてみせた。

(あっ……死んだ………)

ハンドバッグの10センチほど向こう側から見える、倉崎の

冷酷な 眼

その瞬間、鮫島は自分の死期を悟った。

「……で、なんでこんなことになってんだ？」

引ったくり犯からハンドバッグを取り返した倉崎は、

「それはこっちのセリフだわ！ なんてお前、あの引ったくり取っ捕まえなかったのよ！」

かつて倉崎を殺害しようとした、栗色の髪をした少女と、

「うーん、アタシ的には、バッグ返ってきたから良かったしマジ感謝なんだけど、ぶっ飛ばせるならぶっ飛ばして欲しかったかな、なんて。あの野郎マジムカついたし。まあ今となってはどーでもいんだけどね。ホント、返ってきて良かったああ！」

ハンドバッグの持ち主である、金髪碧眼のグラマラス女性と、

「お前は『バッグを取り返して』しか命令してこなかっただろうが。それにガキ、なんてお前がいちいち口出してくんだよ」

三人一緒に、とある喫茶店の店内で、お茶していた。

鮫島からバッグを取り返した倉崎は、鮫島を追い掛けることを止めた。彼にとってはあくまで、『ハンドバッグを取り返すこと』が目的であり、『引ったくり犯』を捕まえることが目的ではなかったのだ。鮫島がその事に気付いていれば、ハンドバッグをすぐに差し出していれば、あのようなデッドヒートを繰り広げることもなく、鮫島は無事に帰ることができたのである。

そして、任務を完了した倉崎は、出発地点へと戻っていく途中で二人に再会した。その直後、話したいことがあるからと、半ば強引に喫茶店へ連れて行かれたのである。

こうして三人は、アンティークで小洒落た内装の店内の、1番奥にある四人掛けの座席に、少女と女性が隣同士、その向かい側に倉崎といった配置で座ることとなった。

「はあ！？ あのまま犯人ほつといたら、また被害者出るかも知れないでしょ？ アイツ多分、この前ニュースでやってた引ったくり犯だと思っし」

カップに注がれたピーチティーをちびちびとすすりながら、呆れ返った顔をする少女。倉崎のことを頭の悪い男だなどと、本気で思っているような口調だ。

「あ、そういえば、そんなニュース見た見た！ って、だったらやっぱりぶつ殺しといたほうが良かったじゃん！ ねえねえ破壊神、バイクのナンバープレートとか覚えてない？ 通報してやる！」

溢れんばかりの乳を、これでもかとかばかりにテーブルの上に乗せて身を乗り出し、向かいの席に座っている倉崎に語りかける金髪女性。馴れ馴れしい口調で、まるで友人に話し掛けるときのようなようだ。もっとも、倉崎は彼女のことを知らないが。

「覚えてねえ。追い掛けるだけで必死だったっつーの」

「はあ！？ お前本っ当に使えない男だわ！ 犯人もナンバープレートも見逃すなんて」

「バッグは取り返したが」

「黙れ天バ」

「て、天……！？」

頬を引き攣らせる倉崎と、手に口を当て笑いを堪える女性。だが、その二人とは対象的に、少女の表情は、徐々に曇っていった。

「……人を救える力があるなら………使いなさいよ………」

そう言って、少女は目を伏せた。

手を膝の上で握りしめ、小さく体を震わし、悔しそうに唇を噛むその姿は

引ったくり事件とは関係ない、『何か』を考えているように見える。

倉崎は、解ってしまった。

何故少女が、バイクを追い掛けると必死になったのかを。

「おい、ガキ……」

「ま、まあまあ。とりあえずさ、自己紹介しようよ自己紹介！
これから協力して、沙理奈ちゃんのお兄さんの自殺の真相を突き止めるんだからさっ！」

不穏な空気を感じ取った彼女は、偶然にも倉崎のセリフを遮るような形で、慌てて話題を転換した。

とある喫茶店での話し合い（前書き）

番外編を削除したらページがバグってしまったので、再アップしますorz

とある喫茶店での話し合い

やがて、つかの間の安堵は終わりを迎えた。

鯨島の左側を併走する倉崎が、鯨島の鞆に向けて手を伸ばした瞬間、彼は自分の死期が近づいたような感覚に、心の底から震え上がった。

「来るんじゃない！」

鯨島は、自身が着ているジャケットのポケットから金色のライターを取り出し、倉崎の頭部目掛けておもいきり投げ付けた。この速度下では正確に狙いを付けるのは難しいのだが、鯨島と倉崎の距離が近かったこともあり、ライターは倉崎の側頭部に命中し鈍い音をたてた。

が、倉崎は動じない。

まったく意に介さず、鯨島の鞆へと手を伸ばしてゆく

「鞆……返せて……言っただらオが！」

「ひいっ！」

初めて聞いた、倉崎の怒鳴り声。洞窟の奥に住む魔物が咆哮したような、低くドスの聞いた声が空気を震わす。

さらに、見てしまった。

倉崎の、それだけで人一人殺せるのではないかと思ってしまう、鋭く睨みつけてくる、眼を。

かつて鯨島が味わったことのある、人を人とも見ていない、道端の小石やそこら辺を飛び交う虫ケラ程度にしか彼を見ていない、眼差しを。

「来るなあああ！」

鯨島は、辛うじて『鞆を返せ』という言葉を理解し、金髪の女性から奪ったハンドバッグを倉崎の顔面目掛けて投げ付けた。

「死ぬよおおお!!! バケモノオオオ!!!」

魂核から叫んだ願いは、フルフェイスヘルメットの中で反響

するだけ。

倉崎はいとも簡単に、片手でハンドバッグを受け止めてみせた。

(あつ……死んだ……)

ハンドバッグの10センチほど向こう側から見える、倉崎の

冷酷な 眼

その瞬間、鮫島は自分の死期を悟った。

「……で、なんでこんなことになってんだ？」

引ったくり犯からハンドバッグを取り返した倉崎は、

「それはこっちのセリフだわ！ なんてお前、あの引ったくり取っ捕まえなかったのよ！」

かつて倉崎を殺害しようとした、栗色の髪をした少女と、

「うーん、アタシ的には、バッグ返ってきたから良かったしマジ感謝なんだけど、ぶっ飛ばせるならぶっ飛ばして欲しかったかな、なんて。あの野郎マジムカついたし。まあ今となってはどーでもいっただけだね。ホント、返ってきて良かったああ！」

ハンドバッグの持ち主である、金髪碧眼のグラマラス女性と、

「お前は『バッグを取り返して』しか命令してこなかっただろうが。それにガキ、なんてお前がいちいち口出してくんだよ」

三人一緒に、とある喫茶店の店内で、お茶していた。

鮫島からバッグを取り返した倉崎は、鮫島を追い掛けることを止めた。彼にとってはあくまで、『ハンドバッグを取り返すこと』が目的であり、『引ったくり犯』を捕まえることが目的ではなかったのだ。鮫島がその事に気付いていれば、ハンドバッグをすぐに差し出していれば、あのようなデッドヒートを繰り広げることもなく、鮫島は無事に帰ることができたのである。

そして、任務を完了した倉崎は、出発地点へと戻っていく途中で二人に再会した。その直後、話したいことがあるからと、半ば強引に喫茶店へ連れて行かれたのである。

こうして三人は、アンティークで小洒落た内装の店内の、1番奥にある四人掛けの座席に、少女と女性が隣同士、その向かい側に倉崎といった配置で座ることとなった。

「はあ！？ あのまま犯人ほつといたら、また被害者出るかも知れないでしょ？ アイツ多分、この前ニュースでやってた引ったくり犯だと思っし」

カップに注がれたピーチティーをちびちびとすすりながら、呆れ返った顔をする少女。倉崎のことを頭の悪い男だなどと、本気で思っているような口調だ。

「あ、そういえば、そんなニュース見た見た！ って、だったらやっぱりぶつ殺しといたほうが良かったじゃん！ ねえねえ破壊神、バイクのナンバープレートとか覚えてない？ 通報してやる！」

溢れんばかりの乳を、これでもかとかばかりにテーブルの上に乗せて身を乗り出し、向かいの席に座っている倉崎に語りかける金髪女性。馴れ馴れしい口調で、まるで友人に話し掛けるときのようなようだ。もつとも、倉崎は彼女のことを知らないが。

「覚えてねえ。追い掛けるだけで必死だったっつーの」

「はあ！？ お前本っ当に使えない男だわ！ 犯人もナンバープレートも見逃すなんて」

「バッグは取り返したが」

「黙れ天バ」

「て、天……！？」

頬を引き攣らせる倉崎と、手に口を当て笑いを堪える女性。だが、その二人とは対象的に、少女の表情は、徐々に曇っていった。

「……人を救える力があるなら………使いなさいよ………」

そう言って、少女は目を伏せた。

手を膝の上で握りしめ、小さく体を震わし、悔しそうに唇を噛むその姿は

引ったくり事件とは関係ない、『何か』を考えているように見える。

倉崎は、解ってしまった。

何故少女が、バイクを追い掛けると必死になったのかを。

「おい、ガキ……」

「ま、まあまあ。とりあえずさ、自己紹介しようよ自己紹介！
これから協力して、沙理奈ちゃんのお兄さんの自殺の真相を突き止めるんだからさっ！」

不穏な空気を感じ取った彼女は、偶然にも倉崎のセリフを遮るような形で、慌てて話題を転換した。

とある喫茶店での話し合い〔2〕

「アタシの名前は、磯菱華憐^{いそびしかれん}。17歳の高校2年生よ」
倉崎に向けて、彼女はそう名乗った。

抜群のスタイルを誇る彼女がまだ高校生だということに倉崎は驚いたが、なるほど、言われてみれば、その顔にはいくばくかの幼さが滲んでいる。

しかしそれよりも、気になることがあった。

「磯菱、だと？」

倉崎は、その名字に聞き覚えがあった。いや、この国に住んでいる者なら、その名称に誰しもが共通の連想をしたことだろう。

「そう。キミが今思った通り、あの磯菱グループよ。アタシは磯菱グループ会長の娘、いわゆる社長令嬢ってわけ」

自らの素性を躊躇いもなく明かした華憐。しかしその口ぶりは、金持ちのお嬢様なら少なからず抱いているであろう傲慢も優越感も見せず、むしろ淡々としていた。

日本最大、世界でも5本の指に入るほどの大財閥、『磯菱グループ』。今から6年前、人口流出と商工業の荒廃に喘いでいたこの街
狐原市の再生に名乗りを上げたコンツェルングループだ。

僅か3年で街を建て直した、この街の救世主とも言える存在なのだが、無視できない問題が二つある。

一つ目は、磯菱グループによる商工業の独占。

この街にかつて存在していた中小企業はほとんど買収され、新たに参入してきた企業もほとんどが磯菱グループの傘下。狐原市は、磯菱グループには逆らえない、磯菱の王国となってしまうのだ。

とはいっても、この街の経済は活性化し教育施設や公共基盤も充実したので、不平不満を言う者は少ない。

二つ目は、治安の悪化。

実際には磯菱グループと関連性が証明されているわけではないのだが、磯菱グループが参入してからというもの、この街にはいくつもの不良グループが乱立して横暴を働くようになったのだ。

犯罪発生件数は6年間右肩上がり、薬物や銃刀も取引されている。若年層の不良だけでなく、近年では暴力団組織の介入も目立つ。

倉崎は、磯菱と治安悪化の関連性についてはまったく知らないのだが、この街に引越して三ヶ月で、磯菱関連の企業が軒を連ねている実態、明らかな治安の悪さについては気付いていた。

「んで、なんで磯菱グループのお嬢様が、このガキに協力するとかほざいてんだ？ このガキの知り合いかなんかか？」

「うっん、沙理奈ちゃんのお兄ちゃんの知り合い。沙理奈ちゃんの事は、お兄ちゃん　翔かけるが見せてくれた写真で見たことがあるだけで、今回が初対面よね。最初見たときは思い出せなかったけど」

そう言っって華憐は、隣に座っている少女に同意を求めた。少女は小さく頷きながら、ピーチティーに砂糖を追加している。

「どうやらこの少女は、沙理奈という名前らしいと、倉崎は理解した。兄の名前が夢川翔だったから、夢川沙理奈か。」

「翔は中学時代の後輩で、それなりに親交あったから、アタシとしても放つて置けなかったの。それに……」

彼女はそこで一拍置くと、
「翔の死は、自殺じゃない。少なくとも、アタシはそう確信している」

碧い瞳に意志を宿し、はっきりとそう言った。

「……どうしてそう言い切れるんだ？」

「アタシは、翔が自殺するような男には思えないの」

「自殺する奴の友達は、たいていそう言うもんだ」

「どうしてそう言い切れる？」

先程の倉崎の言葉を使って、彼女は淡泊に切り返した。

「……………」

倉崎は言葉に詰まる。

実際、彼も自殺かどうか疑わしく思っているので、反論はしない。「まあ、そういうのはアタシの主観に過ぎないからいいとして……、調度アタシ、自分で独自に調べようと思っていたの。この街の警察は役にたたないからね。そしたらたまたまさつき、沙理奈ちゃんとキミに会ったじゃない。キミが引ったくりをソニックみたいなスピードで追い掛ける間、沙理奈ちゃんから大体の事情は聞いたわ」

「……つか、お前は俺のこと知ってるのか？ さつきから随分と馴れ馴れしいがよ」

そういえば、引ったくりにハンドバッグを奪われヒステリー化していた彼女は、倉崎を発見するなり歓喜し、倉崎にバッグの奪還を要請した。猛スピードで爆走^{はし}るオートバイを自転車^{はし}で追い掛けるなど、普通の人間では絶対にできないようなことを、彼女は彼に頼んだ。彼が人間を超越した能力を持っているということを知らなければ、そのようなことは頼めないはずだ。沙理奈はほとんど、その場の勢いで命令していたようだが。

「初対面だけど、キミは有名人だからね。それと、馴れ馴れしいのは性格よ、せ、い、か、く」

彼女はニヤニヤと笑ってみせ、

「あ、あと、『お前』とか『磯菱』とかじゃなくて、『華憐』って呼んでくれる？ 名字で呼ばれるのも好きじゃないし」

「断る」

「呼んでくれなきゃ、キミのこと名前^{なまえ}で呼ぶよ？」

子悪魔のような笑顔でそう言われ、倉崎はほんの少し、嫌な汗をかいた。

「……ちつ、分かった分かった。華憐な華憐」

3秒ほど逡巡した後開き直り、しぶしぶ彼女の要望に応えてやることに決めた。

「……そんなくだらないこと話してないで、華憐さん……、どうやって調べるっていうんですか……？」

沙理奈が、若干不機嫌そうに、おずおずと口を開いた。すると華憐は、待ってましたとばかりに、

「お姉さんに任せて！ アタシには優秀な執事が付いてるから、人捜しならおてのものよ！」

（執事？ …… ああそっぴや、こいつは磯菱グループのお嬢様だったな）

「倉崎クンもドチートな人外のバケモノで破壊神だけど、」

「誰が人外だ」

「うちの執事もチート具合じゃ負けないんだから！」

そう言っただけで彼女は胸を張った。胸が大き過ぎてブルンブルンと揺れ、周りの座席の客が一斉に目を見張ったが、倉崎はそのような脂肪の固まりには興味を示さなかった。むしろ呆れている。

「とりあえず、沙理奈ちゃんに翔の遺書を渡したってゆー男を捜し出せばいいのよね？」

彼女はハンドバッグの中から水色の携帯電話を取り出すと、何者かに電話をかけはじめた。

とある喫茶店での話し合い〔2〕（後書き）

ツイッター開設しました！

投稿完了の通知、小説に関する諸連絡などを行います。

フォローお願いします。

ユーザー名は、HonamiNarusawaです！

とある喫茶店での話し合い〔3〕

「あ、もしもし？ 猛たける？ アタシよアタシ。執事としてキミに命令するわ。人捜しなんだけど……」

『僕はアナタの執事じゃありません！』

携帯電話のスピーカーの向こうから、トーンの高い、男性の怒鳴り声があった。沙理奈はその声の大きさにびくつと跳びはね、倉崎も僅かに驚いて、小さくのけ反った。

「執事も 元 執事も変わらないじゃん？ 相変わらずアタシのパシリなわけなんだし、……うんうん、あゝあ、昔はあんなに媚び売ってたのにね、……まあまあ、細かいことは置いといてさ、……うんうん、というわけで依頼よ依頼。今から喫茶店「ルノール」に来て。アタシ入れて3人ほどいるから。……え？ お前が来い？ いいじゃん近いんだから。お客様サービスよお客様サービス。お金は弾んどくから、……というわけで10分で来てね」
快活に言い放つと、相手の返事を待たずに、華憐は携帯電話を閉じた。

「……誰か来んのか？」

面倒臭い展開に若干眉をひそめながら、倉崎はテーブルの上のアイスコーヒーをすすする。

「元 執事……ってゆーか探偵ってゆーか何でも屋ってゆーか便利屋ってゆーか、まあ早い話、アタシの便利な手駒って感じ？ あ、沙理奈ちゃん、これからその手駒クンがやってくるから、例のお兄さんの友達って野郎の顔、そいつが来たら説明してあげて」

「……わかりました……けど……、お前！」

沙理奈は顎を引いて、倉崎をキリツと睨むと、

「もし、もしお兄ちゃんが、本当にお前のせいで死んだんだってことになったら……、お兄ちゃんの前で土下座して謝りなさいよね！
いい？ 分かった？」

これだけは譲れないと、彼に宣戦布告をした。倉崎は、痛々しいほどの虚勢を張ったその眼差しを、目を逸らさずに受け止め、

「ああ？　なんで俺がそんなこと……」

グサリ。

言いかけて彼は、痛みを感じた。唐突に、なんの予兆もなく。

自分の体に意識を巡らせてみても、痛みが発生している部位は明確には特定できない。それどころか、考えれば考えるほど、難解な迷路を真っ暗闇の中あてもなく進んでいるような、不安な気持ちになっってくる。

ただ、一つだけ、分かることがある。

この痛みは、かつて少女の襲撃を退けたとき、少女の涙を見た瞬間に感じた痛みと同じだということだ。

さらに、過去にナイフによる刺突を食らった経験もある彼は、こう思った。

今感じているこの痛みは、そんなものとは比較にならないほど、痛くて苦しいものだ、と。

(……ったく、わけわかんねえっつの……)

少女の目元は、次第に潤んできた。亡き兄のことでも、想っているのだろうか。

倉崎がかつて見捨てた、小柄で気の弱い少年のことを。

このお金がないと夕飯が作れないと言っていた、少年のことを。

「……………分かったよ。土下座でも何でもしてやる」

半ば自棄気味に、倉崎は吐き捨てた。

沙理奈は全身に張っていた力を抜いて、椅子の背もたれに体重を預けた。倉崎の解答に、一先ず納得したようだ。

「で、とりあえず、俺が原因じゃなかった場合を仮定して考えてみるけどよ。第三者が、お前の兄貴の自殺を利用してお前に俺を殺させようとした、っつーのが妥当じゃねえのか？」

「遺書はどうなの？　偽装したとか？」

「あれはお兄ちゃんの字だったもん！　絶対に！」

華憐の意見に、沙理奈は真つ向から反論した。
「じゃあ逆だ。お前に俺を殺させるために、第三者が兄貴に遺書を
書かせた、さらに言えば、お前の兄貴をそのために殺した、っつー
のはどうだ？」

その発言に、後の二人が一気に凍り付いた。この場の温度が氷点
下まで下がったかのように錯覚させられ、沙理奈はブルツと震え上
がった。

倉崎は続ける。

「お前……華憐は、翔は自殺するような男じゃないって言ったよな
？」

「え、ええ。そう確信してる」

「で、ガキ。お前はどつなんだ？」

質問を振られ、沙理奈はしばらく両手を組みながら考えると、

「お兄ちゃん……明るくて優しく、昔から友達は多いほうで、
パパが死んで家が大変なことになってからも、ずっとずっと笑顔で
私を支えてくれて……」

沙理奈は、搾り出すように兄のことを語り始めた。兄との思い出
を顧みながら、沙理奈は徐々に顔を俯けていく。

「……やっぱり、お兄ちゃんが私を置いて自殺しちゃうなんて
……信じられないよ……」

少女の声は、次第に涙混じりになっていった。華憐は心配そうな
顔で少女を見つめ、倉崎は……目を逸らした。

「……まあ、俺のこと英雄扱いしてたっつーのは置いといてよ。二
ユース見る限りでも、やっぱり自殺の可能性は低いんじゃないか？
お前の兄貴をカツアゲしてた野郎に聞いても、いじめはほとんど
受けていなかったらしいよ」

『いじめを受けていて精神的に限界だった』という遺書の記述と、
いじめは受けていないという証言は矛盾する。

「待って。倉崎クンを殺すただけに翔を殺したってゆーのは、い
くらなんでも飛躍し過ぎじゃない？ だったら直接倉崎クンを狙え

ば……」

「まあそうなんだがよ。相手がガキのほうで倉崎は油断しやすい、とでも思ったんじゃないか？ それに、俺を直接狙って、失敗すれば返り討ちに遭うのは目に見えてるわけだしよ」

直接彼を襲うリスクと、別の犯罪を犯してまで間接的に彼を襲うリスク。どちらが高いかは、難しいところだろう。反撃に遭えば病院送りは免れないわけだし、別の犯罪が露呈してしまう可能性も捨て切れない。

「……確かに。倉崎くんはそうまでして殺す価値のある人間……というより、フォックスハウンド 狐狩猟犬 みたいな物騒な輩から怨みを買ってる人間だしね……」

「もしくは、ただ単に夢川翔を殺すのが目的だった、とかな」「どういうこと？」

倉崎が新たに提示した可能性に、沙理奈が聞き返す。

「今言った通りだ。夢川翔を殺したいから殺した、その前に何らかの方法で夢川翔を脅して遺書を書かせて、ついでお前に俺を殺させるように仕向けた、とかよ」

「ありえそうね。動機とかって思い浮かぶ？」

華憐の問い掛けに対し、倉崎は、

「知らねえ。おいガキ、お前の兄貴は人に怨み買ってたりとかしてなかったか？」

「……………わからない」

しばらく考えを巡らせてみたが、沙理奈はそう答えるしかなかった。

「まあ、俺から言い出しといてなんだが、ここでうだうだ話しても無駄だよな。とりあえずは、夢川翔の友人って奴を取っ捕まるのが先ってこつた」

その意見に同調するかのように、沙理奈も華憐も静かになり、三人は無言でそれぞれの飲み物をすすった。時刻はすでに夕方の5時を回っていたが、真夏だけあって、店の窓から差し込む光はまだま

だ明るかった。

（　　そういや、随分久しぶりだな……。こんなに長ったらしく他人と会話すんのも、誰かと一緒に店に入って、一緒にテーブルに座るのもよ……）

何の因果で、こんなことになったのだろうか。ただ、彼はこの暇つぶしを、もう面倒臭いとは思っていなかった。むしろ、見えざる手に背中を押され、早く先に進めと急かされているような気さえした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3588w/>

破壊神は少女のために

2011年10月19日07時30分発行